長唄　越後獅子

文化八年(1811年)　三月

作詞　松井 幸三
作曲　九代目 杵屋 六左衛門

[前弾]〈三下り〉

打つや太鼓の音も澄み渡り　角兵衛 角兵衛と招かれて
居ながら見する石橋の 浮世を渡る風雅者
歌ふも 舞ふも 囃すのも　一人旅寝の草枕
おらが女房を ほめるぢゃないが　飯も炊いたり水仕事
麻撚るたびの楽しみを　獨り笑みしてエー、エーエー、来りける
(合方)
越路 潟　お国名物は 様々あれど 田舎訛の片言まじり
しらうさになる 言の葉を
(合方)
雁の便りに届けてほしや
小千谷 縮の 何処やらが　見え透く國の習ひにや
(合方)
縁を結べば 兄やさん、アアア、アアア
兄ぢゃないもの　夫ぢゃもの
[浜唄]
来るか来るかと 濱へ出て 見ればの ほいの 濱の松風
音や まさるさ やっとかけの ほいの まつかとな
好いた水仙 好かれた柳の ほいの　心 石竹　気はや 紅葉さ
やっとかけの ほいの まつかとな
辛苦甚句もおけさ節

(合方)
何たら 愚痴だえ　牡丹は持たねど 越後の獅子は
(合方)
己が姿を花と見て　庭に咲いたり 咲かせたり
そこの おけさに異なこと言はれ　ねまりねまらず 待ち明かす
御座れ　話しませうぞ　こん小松の蔭で
松の葉の様に こん細やかに
(合方)
己が姿を花と見て　庭に咲いたり 咲かせたり
そこの おけさに異なこと言はれ　ねまりねまらず 待ち明かす
御座れ　話しませうぞ　こん小松の蔭で
松の葉の様に こん細やかに　弾いて唄ふや 獅子の曲
(合方)
向ひ小山の しちく竹 いたふし揃へて きりを細かに　十七が
室の小口に昼寝して　花の盛りを夢に見て 候
(合方)
見渡せば見渡せば　西も東も花の顔
いづれ賑ふ　人の山　人の山
(合方)
打ち寄する 打ち寄する　女波男波の絶え間なく
逆巻く水の面白や 面白や
(合方)
晒す細布 手に くるくると　晒す細布 手に くるくると
いざや帰らん　己が住家へ